つながる つなげる 伊勢原

～市制施行50周年の軌跡をたどり未来へとつなぐ～

市制施行 50th
つながる つなげる 伊勢原のひとコマ
Isehara city 50th Anniversary

CONTENTS

目次・市長あいさつ ―― 01
市制50年のあゆみ ―― 03
歴史のまち
日本遺産 大山詣り ―― 11
参詣のまちの過去から未来 ―― 13
ゆかりの武将のおまつり ―― 14
豊かな自然の中で成長してきたまち
自　然 ―― 15
商　業 ―― 17
ものづくりのまち
名産品 ―― 19
農　業 ―― 21
工　業 ―― 23
しあわせ創造都市いせはら ―― 25
伊勢原市議会 ―― 30
伊勢原の四季 ―― 31
データで振り返る伊勢原 ―― 33

つながる つなげる 伊勢原のひとコマ
市制施行50周年
キャッチフレーズ・ロゴマーク

キャッチフレーズには自然、歴史、生活などの「ひとコマ」がつながって未来を創り、幸せを紡ぐという想いが込められています。ロゴマークは50周年の「50」を基調に、「0」は大山こまをモチーフとしています。

大山阿夫利神社下社からの眺望

先人たちが築いた歴史を胸に、希望ある未来へ

伊勢原市長　髙山 松太郎

伊勢原市は昭和46(1971)年3月1日に市制を施行し、本年で50周年を迎えました。

秀峰大山の麓に広がる本市は、恵まれた自然環境や温暖な気候、交通アクセスの良さから首都圏近郊都市として発展し、当時4万5千人であった人口は10万人を超えるまでになりました。令和という新たな時代になり、長年待ち望んだ新東名高速道路 伊勢原大山インターチェンジの開設など、さらなる発展の契機を迎えているところです。

この冊子は市制施行50周年を記念して、先人たちが守り築きあげた歴史・文化を振り返り、次なる時代への確かな一歩とするため制作したものです。市民一人一人が未来に希望をもち、市民としての誇りを育みながら、安心して暮らし続けることができる「しあわせ創造都市いせはら」の姿をご覧いただければ幸いです。

市制50年のあゆみ

50th

公共施設の建設や市民生活に関わる事業、取り組みを中心に、
この50年間の市内の主な出来事をご紹介します。

1971～1979年 好景気に沸く時代に誕生

伊勢原市は昭和46(1971)年、県下15番目の市として産声をあげました。昭和20年代後期から40年代後期にかけては、日本経済が飛躍的な成長を遂げた時期。市内でも中央通りの道路拡幅開始や伊勢原駅南口の整備など、市の基盤を作り上げていきました。

1971

市制施行（人口4万5102人）

「人口3万人を超える」などの要件を満たし市制を施行。施行に伴い浜田好一町長が市長となり、当日は市役所開所式や花火打ち上げなどを行った

1972

- 市の木（しい・花（ききょう）・鳥（やまどり））を制定
- 鈴川公園を開園
- 県立伊勢原射撃場が完成
- 人口5万人に
- 中村周二氏が第2代市長に就任

内陸伊勢原工業団地が完成（13社が操業開始）

4カ年事業として総事業費53億7000万円をかけた工業団地が鈴川に完成。運動場や緑地地帯を設け、働きやすい環境づくりに配慮

1973

- 高森地区の一部で下水道使用開始

伊勢原駅南口にバスターミナルを設置

中央にバス乗り場を設置し混雑を緩和。横断歩道と歩道の段差を縮めて歩きやすくした

1974

- 市ノ坪公園を開園
- 自然環境保全地域に大山・日向の4区域を指定

1975

- 人口6万人に
- 組合立伊勢原中学校が市立伊勢原中学校に

東海大学医学部付属病院が開院

当時の病院診療部門の水準を超える診療施設を完備した総合病院

老人福祉センター阿夫利荘を開設

1976

- 清掃工場に180トン焼却炉（90トン炉2基）が完成
- 大山こまがメキシコへ（「世界工芸会議」に日本代表として参加）

1977

昭和52年当時の中央通り

- 推奨観光みやげ品に大山こまなど8品目が選定
- 印鑑登録がカード化

市役所新庁舎が完成

1階に窓口業務を集中化し、市民サービスを追求した庁舎。併せてレストラン棟、公害調査所も完成

1978

- 大山公民館を建設

市役所屋上からの大山

緑台小学校、竹園小学校を開校

成瀬小学校、桜台小学校の児童増加に伴い新設（写真は緑台小学校）

1979

- 大田公民館を建設
- 産業能率大学が開校
- 前高森土地区画整理事業が完成

休日診療所を開院

市民の長年の願いであった休日診療所が、市医師会の協力の下、八幡台の旧保健ステーションで業務を開始

1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979
昭和46年3月1日	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年

1980～1989年 ゆとりを求める時代 昭和から平成へ

パソコンや家庭用ゲーム機の発売、ゆとり教育の実施など、経済中心から文化的な面も重視される時代になりました。伊勢原市では市民文化会館、図書館、子ども科学館を開館。昭和64年1月7日に昭和天皇が崩御され、昭和から平成に改元されました。

1980

市民文化会館を開館

市の文化拠点施設として市庁舎北側に建設。1204席の大ホール、392席の小ホールのほかリハーサル室、喫茶コーナーを完備

- 成瀬公民館を建設
- 市民の森ふじやま公園、緑ヶ丘公園、東富岡公園を開園
- 市営大山駐車場が完成
- 人口7万人に

1981

- 防災行政無線を開始
- 比々多公民館を建設

米・カリフォルニア州ラミラダ市と姉妹都市提携

市内に本社を構える株式会社アマダが、同市に子会社を設立したことがきっかけで提携

1982

- 高部屋公民館を建設
- 消防署南分署およびコミュニティ防災センターを開設

障害福祉センター(現:障害福祉センターすこやか園)開設

中沢中学校を開校

伊勢原中学校の生徒増加に伴い、市内4番目の中学校として誕生

1983

- 総合運動公園の建設始まる

1984

伊勢原南公民館を建設

中央通り全線拡幅完了

昭和47年から道路拡幅を行っていた工事が完了

1985

- 東海大学医学部付属病院に救命救急センターが開設
- 永井高夫氏が第3代市長に就任

消防署南分署で救急業務を開始

小田急線以南の市域をカバーする救急隊を配属

- 消防庁舎(本署)を増改築、総合指令装置を導入
- 清掃工場に90トン焼却炉が完成
- 下落合、板戸の土地区画整理事業が完成

新装した消防庁舎に総合指令装置が導入され、市内の小学生が見学

1986

- 健康・文化都市を宣言
- 武道館を新築移転

長野県茅野市と姉妹都市提携

市制施行15周年を記念し、諏訪大社の御柱祭でも知られる茅野市と姉妹都市に

第1回大山登山マラソン大会

昭和56年以来5年ぶりに復活。以降、毎年3月に開催

1987

終末処理場(現愛称:アクアクリーンセンター)が完成

当初の処理能力は1万5000人分。完成後は10万人分超の対応が可能に

- 人口8万人に
- 成瀬第一特定土地区画整理事業が完成
- 第1回平和のつどいを開催

1988

- 御所の入森のコテージを開設

市体育館を開館

総合運動公園の中心施設として開館。初日は全日本男子バレーボールの試合が行われた

1989

図書館と子ども科学館を開館

プラネタリウムやクーデ式天体望遠鏡を備えた科学館、蔵書11万冊(当時)の図書館を擁する複合施設

「すこやかリズム体操」完成

市民の健康維持・促進のため創作したオリジナルの体操

1980 昭和55年 | 1981 昭和56年 | 1982 昭和57年 | 1983 昭和58年 | 1984 昭和59年 | 1985 昭和60年 | 1986 昭和61年 | 1987 昭和62年 | 1988 昭和63年 | 1989 平成元年

1990～2000年 人口9万人に到達、平和都市を宣言

東海道新幹線「のぞみ」の運行開始や山形新幹線開業など、東京周辺のインフラが向上した時代。文化やソフト分野を重視する傾向は続いており、伊勢原市でも中央公民館や伊勢原シティプラザをオープン。土地区画整理事業の推進により人口も増え、より住みやすいまちへという意識が高まりました。

1990

平成2年

- 人口9万人に
- 成瀬コミュニティセンター、伊勢原北コミュニティセンターを開設
- 環境美化センターが完成
- 東高森特定土地区画整理事業、下糟屋土地区画整理事業が完成

伊勢原球場が完成

開場式後はプロ野球オープン戦(大洋対ロッテ)で祝った

1991

平成3年

中央公民館を建設

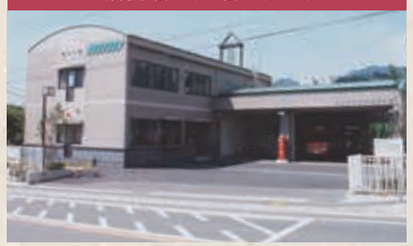
広い展示ホールや本格的な茶室、陶芸窯のある美術工芸室などを備えた総合的な生涯学習施設

1992

平成4年

- 比々多第一特定土地区画整理事業が完成
- 東大竹特定土地区画整理事業が完成
- 千津ふれあい公園を開園
- 「みかんの木オーナー制度」を開始

消防署西分署が完成



市西部地域の消防・防災活動を充実するため、三ノ宮に市内3番目の消防署が完成

1993

平成5年

- 堀江侃氏が第4代市長に就任
- 平和都市を宣言
- 串橋特定土地区画整理事業が完成

太田道灌公の銅像を市役所に移設

昭和50年に寄贈を受けた銅像を、旧伊勢原公民館の敷地から移設

1995

平成7年

- 伊勢原南コミュニティセンターを開設
- 資源の分別収集を市内全域に拡大
- 日向薬師宝城坊本堂が国指定重要文化財に

愛宕滝を復元

1996

平成8年

- 公募による有審査の美術展、第1回いせはら市展を開催

1997

平成9年

伊勢原シティプラザが全館オープン

休日夜間診療所(現:休日夜間急患診療所)や休日歯科診療所、休日薬局、社会福祉協議会、商工会などが入る保健・医療・福祉・産業振興の拠点

シルバー人材センターが設立

市民文化会館で行われた設立総会

1998

平成10年

第53回国民体育大会(かながわ・ゆめ国体)秋季大会を開催

市内ではソフトボール少年男子、ライフル射撃の競技を実施。多くの市民ボランティアが全国の選手を迎えた

炬火リレー式典

1999

平成11年

- 稲荷久保土地区画整理事業、坪ノ内特定土地区画整理事業が完成
- 市ホームページを開設
- 子育て支援センターを開設

石田小学校を開校

成瀬小学校の児童増加に伴い、市内で10番目の小学校が誕生

2000

平成12年

- 原之宿、池端、粕上原の土地区画整理事業が完成

大山バイパスが一部開通

旧大山駅から諏訪裏橋までの約800mの区間が開通。令和3年度には全線開通予定

2001～2021年 次世代に向け、大きな飛躍を遂げた年代

21世紀となり、伊勢原市は市制施行30周年を迎えました。このころは平成23年の東日本大震災や集中豪雨など、歴史的な災害が相次いだ時代でもあります。伊勢原市では「大山詣り」のストーリーが日本遺産に認定され、新東名高速道路 伊勢原大山インターチェンジが開設されるなど、次世代へのあゆみを確実にしました。

2001

9月10日、市の総人口が10万人を突破。この日出生届が出された10人の新生児には、記念品の時計が贈られた

人口10万人に

新作能「道灌」を披露

市制施行30周年を記念し制作

- 2001 平成13年
  - ●東部土地区画整理事業が完成
  - ●市議会本会議のインターネット中継を開始
- 2004 平成16年
  - ●稲荷久保第二土地区画整理事業が完成
- 2005 平成17年
  - ●長塚幾子氏が第5代市長に就任
- 2006 平成18年
  - ●愛甲石田駅南口駅前広場が完成

2009

伊勢原駅自由通路が完成

完成に伴い、通路内に住民票の写しなどを発行する市役所駅窓口センターも開設

いせはら市民活動サポートセンターを開設

市民活動の拠点となる施設

- 2009 平成21年
  - ●第1回湘南いせはら芸術花火大会(現:いせはら芸術花火大会)が開催
- 2007 平成19年
  - ●歌川産業スクエアが誕生
  - ●いせはらくらし安心メールを開始
- 2010 平成22年
  - ●丸山城址公園を開園
  - ●高山松太郎現市長が就任

大山の紅葉ライトアップが初開催

今や秋の風物詩となった紅葉ライトアップが、この年にスタート

2005

2010

伊勢原駅観光案内所が開設

要望の多かった観光案内所を開設し、土産品なども販売。平成27年からは愛称が「駅ナカ クルリンハウス」に

2012

ロンドンパラリンピックで秋山里奈さんが金メダル

水泳女子100m背泳ぎ(視覚障がいの部)で優勝。市役所で行われた報告会では多くの市民が祝福した

- 2012 平成24年
- 2013 平成25年
  - ●神奈川県の新たな観光の核づくり認定事業に「大山魅力再発見 平成大山講プロジェクト」が認定
- 2014 平成26年
  - ●成瀬第二特定土地区画整理事業が完成

伊勢原協同病院が新築移転

市民の健康を支えてきた伊勢原協同病院。緩和ケア病棟などが整備され、病児・病後児保育も開設

2014

- 2016 平成28年
  - ●小田急線伊勢原駅に特急ロマンスカーが常時停車化
  - ●高部屋神社が国登録有形文化財、日向薬師宝城坊の獅子頭が国指定重要文化財に
  - ●日向薬師宝城坊本堂の平成の大修理が完了

「大山詣り」が日本遺産に認定

地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを、文化庁が認定する日本遺産。全国で24番目の認定となった
※詳細は次ページ参照

2016

市公式イメージキャラクター「クルリン」が誕生

大山こまの帽子をかぶったキャラクター、クルリンが応募総数1061点の中から選ばれた。市をPRするため市内外で活動中

2013

市制施行50周年キャッチフレーズとロゴマークを作成

ロゴマークのデザインは東海大学教養学部芸術学科の学生が作成

市民や地元大学、関係機関と協力し、ワークショップや市民投票などを経て決定

- 2019 平成31年／令和元年
  - ●新東名高速道路伊勢原ジャンクションが開通
- 2020 令和2年
  - ●大山こま回しで、同時にこまを回した最多人数の世界記録達成(商工会青年部主催、967人成功)
  - ●笛演奏家の福原洋子(本名:尾崎洋子)さんが国指定重要無形文化財保持者に
  - ●産業能率大学学園祭で、世界一長い絵馬の列の世界記録達成(463枚)
- 2021 令和3年3月1日
  - ●市制施行50周年

新東名高速道路 伊勢原大山インターチェンジが開設

伊勢原ジャンクションから伊勢原大山インターチェンジまでの区間が開通。令和5年度には全線開通予定

2020

歴史のまち

日本遺産
大山詣り

庶民が目指した聖地への旅 大山詣り

50th

古くから霊山として関東周辺の人々の信仰を集めた大山。
江戸の人口が100万人とされたころ年間20万人が訪れたといわれます。

大山詣りとは？

武運長久を願って刀を奉納した源頼朝にあやかり、鳶（とび）などの職人たちが願いを込めた巨大な木太刀を江戸から担いで運び、滝で身を清めて山頂を目指した「納め太刀」でも知られます。その様子は歌舞伎や浮世絵に描かれ、平成28年、日本遺産に認定されました。

五雲亭貞秀「大山良弁図」元治元(1864)年（伊勢原市教育委員会蔵）

身を清めた5つの滝の一つ、愛宕滝

団体旅行の元祖、大山講

旅行が制限されていた江戸時代でも信仰目的の旅は許され、庶民の間で流行していました。特に江戸の町から2〜3日で行ける大山は、気軽に参詣できることから行楽地としても大人気で、古典落語「大山詣り」にも取り上げられています。とはいえ当時は一人旅が難しく、人々は近所や仕事仲間で「講（こう）」という団体を作り、大勢で旅をして大山を目指しました。多くの講社が現存し、主に夏山の時期に参詣しています。

大山に通じる大山道（おおやまみち）

江戸時代、大山に至る道は「大山道」と呼ばれ、人々はその道を歩いて大山に向かいました。関東一円に及んでいた道は大山を中心に放射状に広がり、「全ての道は大山に通ず」といわれるほど発達していました。幹線道路には多くの道標が残され、中でも国道246号は主要な大山道として知られています。

参道には訪れた人々を歓迎する「布まねき」が掲げられている

参詣者のために立てられた大山灯籠。夏山の期間中は、今も市内6カ所に立てられている

各地から大山へと向かう道は10前後のルートがあった。上／大山道の道標　下／国道246号

古くから参詣者を迎えた宿坊

宿坊とは、一般的に寺社の宿泊施設のことで、元々は僧侶や参詣者が泊まるための施設でした。大山では御師（おし）と呼ばれる人たちが、訪れる講の人たちの安全を祈願し、宿泊の世話をしたのが始まりです。今でも大山参道に軒を連ね、昔の面影を伝えています。歴史的な建造物の中にそれぞれ神殿が設けられ、とうふなど地元の食材を生かした精進料理が楽しめるのも特長です。

参道に立ち並ぶ宿坊。大山詣りの歴史を今に伝える、風情あるたたずまいが見て取れる

宿坊に備えられた神殿。ここで登拝する講中の無事を祈願する

名物のとうふは、各地の講から納められた大豆と地元の清水で作られたのが始まりとされる

日本遺産のストーリーを構成する主な要素

伊勢原市は「江戸庶民の信仰と行楽の地〜巨大な木太刀を担いで『大山詣り』〜」というストーリーで日本遺産に認定されました。右の一覧を含め21の構成文化財があります。

大山

標高1,252m。古くから山岳信仰の地として崇められてきた

大山寺

西暦755年、良弁僧正が開創。本尊鉄造不動明王は国の重要文化財

阿夫利神社（現・大山阿夫利神社）

石尊大権現をまつる。大山寺とともに大山詣りの目的地の一つ

納め太刀

講中同士が競い合って奉納し、大きなものは7mもあった

宿坊

大山講中が宿泊した宿屋。阿夫利神社の分霊をまつる神殿がある

浮世絵「大當大願成就有が瀧壷」

歌舞伎役者がふんする粋な参詣者の滝垢離（たきごり）の姿を描く

霊山寺（現・宝城坊、通称・日向薬師）

西暦716年、行基により開創。源頼朝や妻の北条政子も訪れた

石雲寺

西暦718年開創と伝わる。壬申の乱で敗れた大友皇子をまつる

比々多神社

延喜式神名帳に掲載されている神社。古墳に囲まれるように建つ

高部屋神社

延喜式神名帳に掲載され、鎌倉時代の武士、糟屋氏ゆかりの神社

歴史のまち

参詣のまちの過去から未来

参詣のまちを語る

歴史ある伊勢原の神社仏閣があゆんできた50年の変遷と未来について、日本遺産の構成文化財である社寺の皆さんにお話を伺いました。

日向薬師宝城坊住職
内藤 京介さん

昭和54年生まれ。平成15年、高野山での修行後、僧侶になる。本堂の「平成の大修理」を機に、先代である祖父の後を継いで住職となる。

大山阿夫利神社権禰宜
目黒 久仁彦さん

昭和61年生まれ。先導師目黒家長男。いせはらシティプロモーション公認サポーターとしても活動し、ドローン空撮による動画等で市の景観をPRしている。

三之宮比々多神社宮司
永井 武義さん

昭和41年生まれ。教育委員（教育長職務代理）、第5次総合計画審議会委員など市政にも長年携わり、現在は比々多観光振興会事務局長としても活動している。

この50年間で、当院の参拝客の様子にあまり大きな変化はないようですが、人数的には年々増加の傾向にあると思います。

そのように、たくさんの方々が参拝に見えるので、寺院側で対応する人間の不在時間をなるべく減らすように心がけ、より多くの参拝客に対応できるよう努めています。

今後の当院が目指す姿としては、寺本来の宗教施設という面と、文化財の宝庫であるという芸術的な部分、加えて観光名所でもあるという部分をバランスよく兼ね備えた寺院でありたいと考えています。

市民の皆さんには、先人たちが大切に守り伝えてきた伝統や文化が、一つの文化遺産だという認識を持っていただければと思います。その思いを共有し、ご協力をいただきながら、伊勢原市全体で発展していければいいと願っています。

子どものころは大山講の参拝が今より多く、一般の参拝者も微減した時期がありましたが、日本遺産に認定後、歴史好きな人から観光目的の人、海外からの旅行者も含め、幅広い方が来山されるようになりました。

大山詣りは昔から人の絆や経済、地域、道さえもつなげてきた稀有な伝統文化です。この地域は多くの人々の想いが積み重なって今に至っています。今後も地域や伝統を通じて、さまざまな縁がつながるよう、先人の想いを引き継いで守り伝え、多くの人に「心のふるさと」と感じていただけるように日々努力を重ねたいと考えています。

さまざまな要因から新しい日常が求められる昨今、市民同士、市民と行政との連携がより必要とされています。この先の50年後を目指し、各々何ができるか考え、伊勢原というふるさとをさらなる発展へとつなげられるよう、互いに協力していきたいと思います。

伊勢原は厚木や秦野よりも寺院が多く、神社も秦野とほぼ同数で、その信仰の原点に大山の存在があるといえます。日向薬師や大山寺は勅願寺として、大山阿夫利神社や当社は延喜式の国幣社として国家鎮護を祈る公の場でした。戦後からの50年では個人の信仰が広がり、観光要素も増しています。歴史や伝統、文化財に加えて、周囲の自然や景観にも関心が高まっています。パワースポット、御朱印などの流行に加え、最近ではSNSの影響も見られます。一方で、感染症や災害などの折には個々の祈りも大切にされていることが実感できます。

歴史はヒストリー、物語はストーリーで語源は同じとされます。日本遺産は歴史や伝統をストーリーという形で捉えますが、それによって多様なものがつながり、魅力が広がります。その中でヒト・モノ・カネが循環する経済、社会が創生されれば幸いです。

歴史のまち

ゆかりの武将のおまつり

伊勢原観光道灌まつり 53年のあゆみ

市の発展とともにあゆみ、市民の手で作り上げてきた一大イベント。その半世紀を振り返ります。

50th

昭和43年・第1回

町村合併記念行事としてスタート

明治100年に当たる年に「観光まつり」として開始。道灌行列や自動車ショーを行いました。

昭和46年・第4回

市制施行を記念し「伊勢原道灌まつり」に改称

翌年開催の第5回から、現在の名称である「伊勢原観光道灌まつり」となりました。

昭和48年・第6回

国民的番組「笑点」の収録で大盛り上がり

桜台小学校で公開収録を実施。この回の視聴率40.5%は、現在も番組の最高記録です。

昭和57年・第15回

姉妹都市ラミラダ市から訪問団

前年に姉妹都市となった米・ラミラダ市の一行がパレードに参加。大歓迎されました。

昭和61年・第19回

長野県茅野市の御柱が初お目見え

姉妹都市の茅野市から御柱を招致。奇祭の再現をひと目見ようと約39万人が訪れました。

平成5年・第26回

芸能人が太田道灌公と北条政子役で初登場

道灌役は俳優の横内正さん、政子役は斉藤慶子さん。現在までに51人が登場しています。

平成13年・第34回

ソーレソレ! 第1回 ISEHARAソーレ大会

市民企画として開催。第40回からは商工まつりの一環としてパレードも行われています。

平成17年・第38回

馬が大興奮、乗馬をあきらめた道灌公

大勢の観客に馬が興奮。道灌役の俳優、大和田伸也さんは全行程を歩いてパレードしました。

平成25年・第46回

市公式イメージキャラクター クルリンがデビュー

クルリンを道灌まつりでお披露目。ステージでダンスをして会場を練り歩きました。

平成29年・第50回記念

まつりの歴史を紹介する記念展示

太田道灌の子孫が道灌公役に

俳優の北村有起哉さんは母方が道灌の子孫。政子役は妻で女優の高野志穂さんでした。

豊かな自然の中で成長してきたまち

自然

伊勢原のトリビア

「伊勢原」という名の花がある

市内の園芸農家が交配して作った「伊勢原」はクレマチスの一種のテッセンで、花の直径が20cm前後と大きく、早咲きなのが特徴です。

50th

まちを取り囲む自然と向き合って、共に暮らす

大山阿夫利神社下社や標高375mの聖峰山頂から眺めると、伊勢原が豊かな自然に囲まれていることがよく分かります。古くから自然と向き合い共生する知恵が、このまちでの暮らしをより快適にしてきました。

PROFILE

亀井（かめい） 隆（たかし）さん

上谷芝桜愛好会 会長

PROFILE

柳内（やない） 春（しゅん）さん

クアハウス山小屋 店長

写真提供：一般社団法人伊勢原市観光協会

1 平成15年当時の渋田川の景色。3色の芝桜が満開となって川岸を彩っている。

2 土手の草刈りや掃除などは、愛好会の会員に加えオーナー制度の方々も協力。

3 現在の渋田川の様子。花も、川沿いに生け垣が続くまち並みも美しい。

遠方からも見物に訪れる春の風物詩。世代と地域をつなぐ渋田川の芝桜

河畔を鮮やかなピンク色に染める芝桜。シーズンには市内外から見物客がやって来ます。川沿いの3軒の家から徐々に輪が大きくなり、現在、上谷芝桜愛好会の会長を務める亀井隆さんの両親も植えるようになったそうです。

「家の前をきれいにしようというので、皆で芝桜の苗を植えたんです。すると人が見に来るようになり、だったら、もっときれいにしようと。それを見てさらに隣の家も植えるようになって…という具合に、どんどん範囲が広がっていったんです」。

渋田川は治水状態が良く、花にとって適した環境であることも、最初に植えた人々は分かっていたのではないかと亀井さんは語ります。

「一番の苦労は芝桜の敵、雑草を刈ることです。夏前には欠かせません。活動を始めた人たちが高齢になってからは、近所の有志が手伝うようになりました」。

現在は子の世代が会を受け継ぎ、市や関係機関をはじめ多くの協力の下、草刈りや苗の植え替え、川の掃除のほか、芝桜まつりの運営などを行っています。また、企業や財団とのオーナー制度を立ち上げるなど、持続可能な活動に向けた努力も重ねています。

先人が残した名所が、時代を超えて世代や地域のつながりという花を咲かせています。

伊勢原で暮らして分かる自然の魅力。居心地のいい地域のつながり

日向地区の自然の中、アウトドアアクティビティが楽しめるキャンプ場には多くの人が訪れます。柳内春さんは約7年前に東京都から移住し、祖父の経営する施設を手伝い始めました。

「50年以上前から祖父が渓流釣りの施設をやっていて、釣った魚を食べたいという人のために、バーベキューをできるようにしたのが始まりです。その後、約25年前にレストランや風呂を作り、現在の『クアハウス山小屋』として営業を始めました。当初はバーベキューや登山帰りのお客さんの利用が多かったようですが、近ごろはキャンプの利用者も増えてきて、施設の中心になってきています」。

日向周辺の自然の特長は、大山が国定公園のため景観が守られていて、四季折々の山野草や野生動物に出会えること。また、周辺の渓流は浅瀬なので安全に遊べます。

「毎年、台風や豪雨の後は川の形が変わるので、そのたびに設営し直します。草刈りもしなければなりません。きちんと手入れしてこそ、自然を楽しめる環境が守られると思います」。

移住して思うのは自然の中で過ごす心地よさ、という柳内さん。アウトドア文化が育つ以前から、自然と市民を結ぶ役割を担ってきたこの場所。これからも大切に守り、未来につないでいきたいと考えています。

1 渓流沿いのバーベキュー施設。とれたての新鮮な魚が味わえる。

2 キャンプ場は林の中にあり、森林浴やバードウオッチングも楽しめる。

3 キャンプ場の近くにある渓流は家族連れにも人気。

豊かな自然の中で成長してきたまち 商業

伊勢原のトリビア

現在の伊勢原駅周辺には、昔から市(いち)が立っていた
今の中央通り一帯にあった伊勢原村には、明治初期から商家が並び、地域で唯一の定期市がにぎわいを見せていたといいます。

50th

人々の暮らしに寄り添い、豊かにしてきた商人魂

50年で機能的な現代生活を送るための環境は変化し、駅周辺には市民の生活を支える施設がそろっています。
大型店舗や複合施設なども誕生する中、個人商店も時代に合わせてその形を変えてきました。

PROFILE
高橋(たかはし) 宏昌(ひろまさ)さん
テーエス瓦斯株式会社 代表取締役社長

PROFILE
小沼(おぬま) 俊輔(しゅんすけ)さん
有限会社小沼酒店

1 店舗のある竜神通り。髙橋さんや界隈の商店で企画して名付け、特徴づけた。

2 昭和40年代の通り。奥に見えるのが伊勢原駅。

3 昭和46年、市制施行を記念した祝賀行事でのパレードの様子。

大切なのは地域の一体感と活性化。通りに「竜神通り」と名付け親しみやすく

伊勢原駅北口にあるテーエス瓦斯は半世紀以上地元を見続けてきた、まちのガス屋さんです。2代目の髙橋宏昌さんは、市制施行の祝賀行事をよく覚えているといいます。

「私は小学校6年生で、中学生たちのちょうちん行列を見物しました。昭和46年は高度経済成長期がちょうど頂点に達する時期。今日より明日はもっとよくなるという気分の時代でした。そんなときに町から市になったので、子ども心にも高揚感があったのを鮮明に覚えています」。

3年後の49年にはオイルショックで経済が下向きに。以来、山あり谷ありの景気の荒波を、一様に乗り越えてきました。

店舗では昭和29年からプロパンガスを扱い始めましたが、都市ガスより歴史が浅いので、先代が近隣の主婦たちに宣伝して回ったそうです。

「46年当時のお得意さんは約2000〜3000軒、現在はその倍以上います。大型店が増えている今、これからの商人は、何かあったらすぐ駆け付けるなど、お客さんとのつながりを一層大事にしなければならないと思っています」。

同時に大型店と共同で大売り出しを開催するなど、地域を一体化させる努力も。個人商店と大型店が一緒に盛り上げていく、魅力的なまちづくりを常に思い描いています。

人が楽しく暮らすまちには、外からも人が来る。老舗酒店の3代目が思い描くビジョン

小沼酒店は伊勢原駅南口の大原町商和会に所属する、約60年続く老舗です。小沼俊輔さんはその3代目。市商工会の青年部長としても活動し、異業種の若手部員たちとイベントを開催するなど、市の活性化に力を入れています。また、家業の酒店の経営でも新しい道を探る日々です。

「昔は問屋さんから入ってくる商品を並べて売るだけでしたが、量販店が増えてからは、他と違う特色が求められるようになりました。それなら、自分の好きな物や作り手の思いが込もった物を、お客さんに薦めたいと考えたんです」。

そこで地方の酒蔵を訪問し、独自のルートでおいしい日本酒を仕入れるようになりました。また伊勢原小売酒商組合の取り組みで作られたリキュール「みかんのお酒」は、味の開発からラベルのデザインまで参加。今後も地域の若手がそれぞれの仕事の価値やこだわり、技術を発信、宣伝できる場を作っていきたいと語る小沼さん。

「伊勢原は古いお店も多く、文化や伝統工芸品、農産物も豊かです。それらの価値をさらに高めて、これまでの良さを生かしながら、まちの魅力づくりをしていきたいです。暮らしている人が幸せであれば、外からも人が来る。そんなまちづくりをしていきたいと思っています」。

1 商工会青年部や独自のつながりで地域のイベントに出店し、市民と交流。

2 イベントや試飲会を行う際は、互いにメニューを提供するなど協力し合う。

3 小沼酒店のある駅南口周辺。マンションが続々と建設されるなど変化も多い。

ものづくりのまち 名産品

伊勢原のトリビア

大山こまは、製作に1年かかる
ミズキの木を1年間自然乾燥させ、木を削り、色を塗るという大変な作業。熟練した技術が必要で、現在は4軒の土産物店で製作しています。

50th

伝統工芸の継承や、名産品再生にかける心意気

大山を代表するアイコンの一つである「大山こま」や、この地が原産の“幻の石”「日向石」。
古くから続く先人の技術が、職人の手により未来へと継承されていきます。

PROFILE
播磨（はりま） 啓太郎（けいたろう）さん
はりまや 代表

PROFILE
成瀬（なるせ） 善之（よしゆき）さん
有限会社成瀬石材店 代表取締役

1 大山こま。芯棒が太く長く、よく回るので縁起がいいとされる。

2 色付けろくろ。約60年前まで使われていた足踏みろくろとともに使う。

3 昭和40年代のこま参道。道沿いに大山こまの店が並んでいた。

大山の門前町で育った定番みやげ。長く愛されてきた伝統工芸を守りたい

江戸時代から大山こまを作り続けている、はりまや。現代表の播磨啓太郎さんで8代目という歴史を誇ります。

「16歳くらいから、父親がやっていたのを教えてもらうわけではなく、見て覚えました。ろくろを使ってこまのような木工品を作るのは木地師といって、昔は大山の参道に一人一軒、店を構えていたんです。大山の木地師が削ったものは肌がきれいで、絵が楽に描けるといわれました」。

材料にはミズキを使いますが、「12月から3月までの葉が落ちた木を買って自然乾燥させ、翌年の10〜11月ごろに初めて使える。その木が今、入手しにくくなっています」。

そうした問題に加え、大山こまの人気は変わらず高いのに、現在職人は5人のみ。平成29年に製作技術が市指定文化財になりましたが、技の習得には時間がかかるため、後継者不足も課題となっています。

「でも、これだけの技術を絶やしたくない。あと何年できるか分からないけれど、作り続けていきたいと思っています」。

90歳になる播磨さんですが、現役の職人さんらしい活力を感じさせてくれます。環境の変化が伝統工芸にも影響を及ぼしていますが、少年時代から一つの作業を続けてきた職人の誇りが、今も大山こまと人々をつないでいます。

現代の技術で、石はさらに美しく。伊勢原への思いが幻の石を輝かせる

成瀬善之さんは石材店の6代目。日向地区で採れる凝灰岩で、江戸時代から重宝されてきた日向石の復活プロジェクト「Sunny-on」を、市内の建築家・荻野貴文さんと推進しています。軟質で加工しやすく、昭和中期までは日向石を扱う石材店が市内に23軒もあり石の町といわれたほど。それが昭和45年を最後に採掘されなくなっていました。

「御影石やコンクリートに取って代わられたと思います。でも、割ると内部が青くてきれいで、火に強く丈夫。それで、地元の名産として復活させたいと思いました。壁材にも使えるし、箸置きなどの小さい物も作れます」。

大山の土壌を構成しているのもこの日向石なので、山やこまをかたどったデザインにするなど、地元のシンボルとのつながりを意識しています。

また、現在の技術で磨くことで、以前はできなかった質感に仕上げられる利点も。若い世代が見出すことで、昔の人々が知らなかった新しい日向石に私たちは出会うことができます。そこには単なる復活ではない、未来志向の可能性が広がります。

「この石のおかげで、いろいろな人たちがつながり始めています。今後、伊勢原の歴史や文化、観光はさらに注目され、発展していくと思います。日向石もその中で、何らかの役割を持てるようにしたいですね」。

1 日向石の加工作業。研磨技術の進化で、これまでにない仕上がりに。

2 企画中の製品たち。大山や大山こまをモチーフにした箸置き、コースターなど。

3 割った直後の日向石。中央の青い部分は時間が経つと、青灰色に変化。

ものづくりのまち 農業

伊勢原のトリビア

フルーツが、北海道から沖縄まで宅配されている。
「フルーツの里」として知られる伊勢原。流通の進展で全国発送が盛んになり、今では売り上げの約半分は地方発送が占めています。

伊勢原の食文化を支えてきた農業は、このまちの財産

昭和30年代前半まで、伊勢原市は純農村地帯でした。現在も野菜や果物が市内外に出荷されています。
また、緑に恵まれた広大な土地柄を生かし、畜産業も盛んです。

PROFILE
荒井（あらい） 新吾（しんご）さん
有限会社荒井牧場 代表取締役

PROFILE
辻（つじ） 敦史（あつし）さん
辻ファーム 代表

1 牧場内にある牧草地。荒井さんの牛はこの地産地消の草を食べて育つ。

2 市内3戸の酪農家の生乳だけを使って作られる「いせはら地ミルク」。

3 昭和30年代中期。牧場で子牛とたわむれる荒井さん（写真左前）。

伊勢原は県内で最も酪農が盛んなまち。子どもたちには牛乳の本当の味を知ってほしい

荒井新吾さんは、60年以上続く酪農家の3代目。当初は畑作との兼業でしたが、父親の代から徐々に牛の数を増やし、現在は搾乳頭数40頭以上の牧場になりました。

神奈川県の酪農は都市近郊型のため輸入飼料を中心に与えるのが一般的ですが、市内では多くの酪農家が自給飼料作りに取り組んでおり、荒井さんも自給飼料での牛の育成と生乳生産にこだわってきました。

「酪農の基本は良質な生乳を作ること。うちの牛には自分で作った飼料を積極的に食べさせています。そのふんを肥料の一部として、資源循環しているんです。地元の畑で栽培されたものをたくさん食べた牛のミルクということで、消費者の方々にも安心してもらえると思います」。

安全・安心な生乳作りのため、徹底した衛生管理が求められる農場HACCP(ハサップ)認証も取得。市民の皆さんに新鮮な牛乳を飲んでほしいという思いから、伊勢原の牧場だけで搾った牛乳の販売に取り組み、現在は市内3戸の酪農家の生乳を使った牛乳が、メーカーから製造販売されています。

共に働く息子さんからの若い意見が刺激になる、と話す荒井さん。

「この牧歌的な環境で新しいことに挑戦しつつ、高品質な生乳作りが未来につながっていけばと思います」。

山の景色と澄んだ空気に移住を決意。出会いが生んだミニトマト専門のファーム

辻ファームの代表である辻敦史さんいわく、「農家の1代目です」。東京での会社員生活をやめて農家を目指したきっかけは、子ども時代の父親とのベランダ菜園体験。大人になってからもそれが心にあり、トマトのフィルム栽培や、土地を貸してくれる人との偶然の出会いが重なって、10年前に伊勢原市へ移住してきました。現在は市内に畑が3カ所あり、ハウスと露地で夏用、冬用に分けて栽培しています。

「このファームの初代ですし、ここで長く農業を営まれている方々と同じことをしてもかなわないので、他との差別化を考えました。それで扱う品種をミニとミディに絞り、種類も厳選して甘さだけではない、濃い味わいを追求しました」。

現在は「coiina（コイイナ）」というブランド名でイタリア料理店に卸すほか、オンラインなどで小売販売もしています。さらにアグリツーリズムなど、消費者との交流も企画中です。さまざまな出会いやつながりがあって今に至っていると、辻さんは語ります。

「伊勢原は、知り合いがみんなどこかでつながっているようなまち。今後、観光が盛んになってほしいけれど、素朴さやきれいな景色は変わってほしくない。今の環境を守りながら、ここならではのトマト作りを続けることが目標です」。

1 日向地区にある景色の良い農場。ここでは屋外でトマトを栽培している。

2 濃厚さが特長のトマトを無添加のジュースに。黄色や緑色の品種も販売中。

3 ハウス栽培の農場。料理店などに出荷するほか、現地で販売も行う。

ものづくりのまち 工業

伊勢原のトリビア

伊勢原は、神奈川の“へそ”である
神奈川県の中央部に位置する伊勢原は、面積重心でみると、市内石田付近が神奈川県の中心点といわれています。

志のある企業が形作ってきた工業史

市内にはグローバルに事業を展開する企業や、信頼性が高いJapan Madeの製造技術を担う工場があります。
利便性が良い土地柄も追い風となり、伊勢原の至る所で未来を見据えた取り組みが行われています。

PROFILE
磯部（いそべ） 任（つとむ）さん
株式会社アマダ 代表取締役社長執行役員

PROFILE
磯崎（いそざき） 直平（なおひら）さん
株式会社磯崎絞製作所 代表取締役社長

1 約50年前に開発。帯状ののこぎり刃を回転させて金属を切断加工する機械。

2 現在、生産している製品。レーザー光で金属板を切断加工する機械と、材料、製品の自動搬入・搬出装置。

3 昭和45年ごろの本社社屋。

展示施設に世界中からお客さまが来訪。東名高速道路など交通の利便性が大きな長所

昭和36年に伊勢原市に工場を新設し、8年後に本社も東京都中野区から移転しました。株式会社アマダは市制施行の2年前から伊勢原市とともに歩んできた企業です。「移転当初、社屋周辺は野原で雨の日は長靴がないと歩けなかったそうです」と現社長の磯部任さん。

「当時、工場と本社で約380人だった社員は、現在約2500人に。金属の薄い板をレーザー光で加工する機械が現在の主力ですが、当時は金属の塊を切断する機械を作っていました。戦前はそうした金属加工の機械が外国製しかなかったのですが、創業者の天田勇が輸入品は高いうえに日本人の背丈には合わないので、ぜひ国産を開発しようと。試行錯誤の末、日本製でも優れた性能だとご評価いただき、そこから自社製品を拡大していきました」。

確かなモノづくりの結果、今や日本製品が世界中で求められ、アマダも世界的な企業に成長しました。

「海外進出は昭和46年で早いほうでした。現在、売上の半分強が海外で、社員数も国内外で半々です。今、伊勢原市には本社機能と展示施設などがあり、世界中からお客さまが訪れています」。

伊勢原事業所は、グローバル本社である一方で地域住民のために災害時の広域避難場所として指定されており、アマダと市民のつながりがより増しています。

へら棒を使ってテコの原理で金属を曲げる。身の回りのモノから未来までを作る工場

磯崎直平さんは創業50年以上になる「へら絞り」という特殊な金属加工会社の2代目社長です。この技術を持つのは市内では1社のみ、神奈川県下でも10社前後といいます。

「扱う物はロケットの部品から日用品までとさまざま。中には浴槽や、お寺の護摩釜などもあります。我々のような職人は、多かれ少なかれ幅広い製品に関わっているんです」。

10年ほど前に父から会社を継いで以来、3D CADや3次元測定器などの新しい技術も導入しました。

「うちの場合は、精密機械に使う部品など細かい注文を受けることが多いので、相応の検査機や製造技術が必要になってくるんです。それで精密な作業をする体制にどんどんシフトするようになりました。昔のように鍋や釜だけを作っているときは必要なかったんですけれど…例えば航空部品やベアリングのメーカーに納める製品などを作る場合は、測る道具にも、より正確性が求められます。そういった安全に関わる物を多く扱うようになっているのも、お客さんの要望にきちんと応え続けてきた結果だと思います」。

父が創業した会社の技術を息子が進化させ、細やかな技から生まれた製品が、ときにお茶の間へ、ときに宇宙へ届く。未来へのものづくりが、ここにも躍動しています。

1 加工に使う機械。金属をへら棒で伸ばして成形する。

2 みこしなどにつける鈴はふるさと納税の返礼品。美しい曲線に技術が光る。

3 現在の工場内。さまざまな製品がここから生まれる。

しあわせ創造都市いせはら

この50年の軌跡を踏まえ、次の半世紀、さらにその先に向けたまちづくり。
伊勢原市で進行中の、より住みよいまちを目指す取り組みをご紹介します。

新東名高速道路

市の発展につながる新東名高速道路。大規模災害時の代替機能確保にも大きな効果を期待

厚木南インターチェンジから伊勢原ジャンクションまでの区間が平成31年3月に、伊勢原ジャンクションから伊勢原大山インターチェンジまでの区間が令和2年3月に開通しました。

令和5年度(予定)の全線開通により東名高速道路の渋滞緩和や広域幹線道路のネットワーク化が実現。大規模災害が発生した際の代替機能確保(ダブルネットワーク)にも大きな効果をもたらします。

同時に、県内外の地域を結ぶ広域的な高速交通が強化され、高速化に加え定時性の確保や物流の効率化などに役立ち、利便性が向上します。また、首都圏から大山・日向・比々多地区などの観光地にも、よりアクセスしやすくなります。

開通により、東京から大山までの所要時間が約22分も短縮。産業や観光など、市内経済への貢献が期待されます。

まちづくり

地域の優位性を生かした新たな産業基盤や中心市街地の都市基盤整備を推進

市の中心市街地である伊勢原駅北口周辺地区は、新たな市街地整備に向け都市計画道路や駅前広場となる用地の先行取得に取り組み、課題である交通環境の改善を進めてきました。現在は道路などの基盤整備とともに市の玄関口としてふさわしい、にぎわいと活力に満ちたまちへ再生させるため、市街地整備の取り組みを推進しています。

また、整備が進められている新東名高速道路など、広域幹線道路の開通による効果を適切に受け止め、地域の特性を生かした産業用地の整備を進めています。市内で3番目の産業用地となる東部第二地区（下糟屋東地区）では、新たな企業集積による雇用機会の拡充により、地域経済の活性化に取り組んでいます。

東部第二地区（写真赤枠内）では、全18区画に製造業や運輸業などの企業立地が進み、順次操業が開始されています。

子育て

子育て世代包括支援センターは、妊産婦や乳幼児の健康保持・増進を図るため、妊娠期から就学前までの支援を行います。

充実した支援体制で、「子どもを育てたい」と思える環境づくりを推進

妊娠届出時から、保健師や助産師などが両親教室、健康相談、乳幼児健診などを通して、就学前までの包括的な支援を行っています。

また、保護者の不安の軽減などに役立てられるよう、子育て支援センターを通じて講座やワークショップを開催するほか、子育て中の親子が互いに交流や相談ができる場を提供することで、自然な交流や仲間づくりを支援しています。

これからも市民の妊娠・出産・育児を支援し、誰もが安心して子育てできるように、支援体制を充実させていきます。「ここで子どもを育てたい」と思える環境づくりを継続して行い、子育て世代に選ばれるまちに向けた取り組みを推進します。

教　育

個別ランチボックスで教室に届く選択制デリバリー給食（加熱方式）を、令和3年度から全4中学校で実施します。

あらゆる場所でICT活用が日常化されている現代。その社会で活動するための資質・能力をつくる教育

ICT（情報通信技術）を活用した教育を実現するため、小・中学校に高速大容量の校内無線LAN環境を整備。児童・生徒に1人1台ずつPC端末を配布して、個に応じた学習やインターネットによる情報収集などに活用します。

これまでの蓄積を踏まえながら、最先端のICT教育を行うことにより、子どもたちがICTを適切・安全に使えるように、情報モラルなどの情報活用能力の育成を進め、豊かな創造性や自立性、社会参加に必要な資質を育んでいきます。

また、令和3年度から全中学校で選択制デリバリー給食（加熱方式）を実施する予定です。充実したメニューの提供を通じて、中学生の健やかな成長と食育の推進を図ります。

医療体制

医師数や病院病床数が県内トップクラス。恵まれた医療環境で、かかりつけ医の普及を啓発

市内には、日常の軽度なけがや病気に対応する一次から、重篤な患者に対応する二次・三次までの救急医療機関があり、市域でほぼ完結できる医療体制が整っています。

高齢社会が進展し、昨今では新型コロナウイルスをはじめとした感染症が拡大する中、市民一人一人が身近な診療所などをかかりつけ医として持つことは、より重要度を増しています。地域の医療を支えるかかりつけ医の普及を図るため、その利点や必要性を、さまざまな場面で伝えていきます。

今後も医師会などの関係機関と連携しながら、市民が必要なときに適切な医療が受けられるよう、救急医療体制を維持するための支援に取り組んでいきます。

最先端の医療・研究施設を備えた大学病院や市民病院とかかりつけ医が連携し、医療サービスを行っています。

高齢者支援

地域で高齢者の生活を支える仕組みをつくり、いつまでも健康に暮らせる環境を整備

高齢者がこれまで培ってきた知識や経験を生かしながら、生きがいを持って暮らせる環境づくりを推進しています。シルバー人材センターや介護施設などとの連携により、多様な就業やボランティア活動などを通じて社会参加できる機会を提供します。

また、要支援・要介護状態への移行を防ぐため、筋力低下を防ぐ体操やミニデイサロンの活動支援など、介護予防事業の普及啓発を進めています。

年齢を重ねても住み慣れた地域で自立した暮らしを安心して継続できるよう、介護や医療、住まい、生活支援などのサービスを包括的に提供する体制の実現を図り、その中核を担う地域包括支援センター（市内5カ所）の運営体制の充実に取り組みます。

市内の老人クラブ(42団体)では健康づくりや親睦事業を実施。高齢者の社会参加や生きがいづくりのため自ら活動しています。

防　災

中央防災備蓄倉庫は市内38カ所の防災備蓄倉庫の拠点として、避難所の運営に必要となる大型の資機材を整備しています。

来るべき巨大地震や風水害に備え、対策を充実・強化。市民の生命と財産を守る、災害に強いまちへ

南海トラフ地震や首都直下地震など大規模地震の切迫性が指摘されている中で、多発する風水害や感染症対策などへの対応も喫緊の課題です。こうした災害や危機事態から市民の安全・安心を確保するため、さまざまな対策に取り組んでいます。

各自治会が組織する自主防災会では定期的に訓練や研修会を開催し、自助・共助の充実に努めています。さらに、公的備蓄を充実するための拠点施設として、新東名高速道路の高架下に中央防災備蓄倉庫を整備しました。

市民一人一人の防災意識の醸成や地域防災力の向上を図るとともに、資機材の整備などで危機管理体制を充実させ、災害に強いまちづくりに取り組んでいきます。

交通安全・防犯

成瀬安全安心ステーションには警察OBの臨時職員らが常駐し、地域の見守りを行うほか、防犯に関する相談を受けています。

市民と連携した交通安全・防犯活動により、安全・安心なまちづくりを推進

悲惨な交通事故をなくすため、警察や関係団体、教育機関などと協力し、事故防止のための啓発活動や交通安全教室、通学路の安全点検などを実施して、交通事故防止対策の強化を図っています。

また地域の安全・安心のため、LED防犯灯や防犯カメラの設置を進めるとともに、地域住民による子どもの見守りや夜間パトロールへの支援、愛甲石田駅南口における地域防犯拠点「成瀬安全安心ステーション」の運営、特殊詐欺の警戒情報などを配信する「いせはらくらし安心メール」の運用を行うことで、犯罪の発生抑止や早期解決を図っています。

市と警察、地域が一体となり、安全で安心なまちづくりを進めます。

市民協働

複雑化する社会の課題や市民ニーズに、市民と行政が協働して取り組む

市民活動団体が企画・立案する「市民提案型」、行政が協働を呼びかける「行政提案型」の2制度により、市民が行政と対等な立場でまちづくりに参加することで、事業を通じた既存施策の見直しや、地域全体の課題解決能力の向上などを図っています。平成23年度の制度開始以来、これまでに約130件を採択してきました。

初の協働事業「国際親睦事業」に伊勢原市国際交流委員会委員長として関わり、春の風物詩となった「いせはら芸術花火大会」で現在も協働を続ける柏木貞俊さんは「開けたい扉があったら諦めず、何度もたたきましょう。伊勢原で実現したい希望があったら、ぜひ『市民提案型』協働事業を活用してください」と呼びかけています。

第1回の協働事業である国際親睦事業には、外国人を含め77人が参加。餅つきや和太鼓演奏など日本の伝統文化を楽しみました。

伊勢原市議会

伊勢原市を快適で住みよいまちにするため、市民全員の代表に、さまざまな事柄を決めてもらう。その代表者が「市議会議員」と「市長」です。

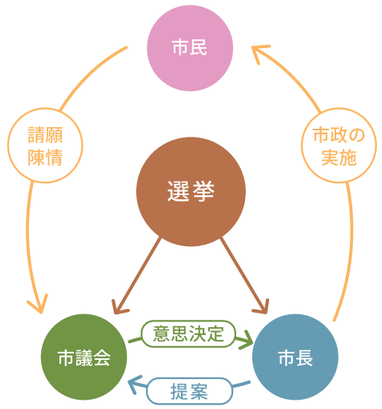
市民の意見を市政に反映させるため市民生活のさまざまな問題について調査や審議を行い、最終的な対応を決定する「市議会」。「議決機関」と呼ばれ、決定に基づいて実際の市政を運営する市長は「執行機関」と呼ばれています。

市議会と市長はそれぞれ独立、対等な立場で議論し、けん制し合うことで調和と均衡を図り、市民の意思を尊重した公正な市政運営に努めています。

現在、議会には総務、産業建設、教育福祉の3つの常任委員会と議会運営委員会が設置されています。年4回の定例会をはじめ、必要に応じて臨時会も開催されます。

本会議は誰でも傍聴ができます。インターネットでは中継のほか、録画での視聴もできますので、ぜひ市議会で行われていることを視聴してみてください。

市政のしくみ



市議会議員

議員数は20人で、4年ごとの選挙で選ばれます。
市内在住で選挙権がある満25歳以上の人は、誰でも立候補できます。

議長　副議長

館 大樹　八島 満雄　田中 志摩子　今野 康敏　中山 真由美　米谷 政久　大垣 真一
越水 崇史　橋田 夏枝　宮脇 俊彦　川添 康大　土山 由美子　長嶋 一樹　小沼 富夫
夛田 嚴　安藤 玄一　相馬 欣行　大山 学　越水 清　山田 昌紀

伊勢原の四季

大山に抱かれるように
四季折々の美しい
豊かな自然と
まつりやイベント

広がる伊勢原市では、
風景が楽しめます。
季節に応じた
をご紹介します。

※催しは状況により中止や延期となる場合があります

春

4月中旬
芝桜まつり
渋田川河畔

「かながわの花の名所100選」にも選ばれている名所。川岸を染める花のカーペットが人々の目を楽しませます。

4月15日
日向薬師春季例大祭
日向薬師宝城坊

修験者による安全祈願の儀式「神木のぼり」や火渡り、本尊のご開帳などが行われます。

4月22日
三之宮比々多神社春季例大祭
三之宮比々多神社

カラクリ人形を載せた山車が氏子区域を巡幸。豊作を祈願し国土創造の神をたたえる祭事です。

5月中旬
公園緑花まつり
総合運動公園

植木や園芸用品、衣類などの露店が並び、ライブ演奏や苗の配布なども行われます。

5月下旬
まが玉祭
三之宮比々多神社

地域で出土した勾玉に由来。特設舞台での奉納演舞や「まが玉づくり体験」などが行われます。

夏

7月上旬
花の市
伊勢原大神宮

多数の模擬店やさまざまなイベントを開催。ほおずきや朝顔をはじめ季節の花がそろいます。

7月27日
夏山開き
大山地区

元禄年間から続く儀式。小伝馬町のお花講が「六根清浄」の念仏を唱え、登拝門の扉を開きます。

8月27～29日
大山阿夫利神社秋季例大祭
大山地区

大山に秋を告げる祭事。みこしの渡御や倭舞・巫子舞の奉納、大山神事能などが行われます。

8月中旬
絵とうろうまつり
大山地区

絵とうろうが光の回廊となり、夜景と相まって幻想的な世界を演出する夏の風物詩です。

6月下旬
日陰道のアジサイ
日向地区

「かながわの古道50選」の一つで、全長約1.5kmの日陰道周辺はアジサイの名所。青や紫の花が初夏の景色を彩ります。

11月中旬～下旬
大山の紅葉ライトアップ
大山寺、大山阿夫利神社下社

2カ所でライトアップを実施。夜景の輝きと艶やかに照らされる紅葉のコラボレーションが楽しめます。

秋

9月中旬
彼岸花
日向地区周辺

田のあぜや野辺で真紅の花が開花。里山や稲穂に赤色が映え、別世界のような風景を描きます。

10月第1土・日曜日
伊勢原観光道灌まつり商工まつり
伊勢原市街

太田道灌公鷹狩り行列をはじめ、市内各所で歌や踊り、演奏などのイベントを開催します。

10月上旬
火祭薪能
大山阿夫利神社社務局

300年の歴史ある神事芸能。かがり火が照らす舞台で厳かな舞が堪能できます。

11月下旬
行政センター周辺イベント
伊勢原市役所周辺

動物と触れ合える畜産まつり、市民団体が活動を発表するサポセンフェスタなどを開催します。

冬

1月8日
初薬師
日向薬師宝城坊

本尊の薬師如来像（国指定重要文化財）のご開帳のほか、健康を願う薬師粥が振る舞われます。

1月中旬
どんど焼き
市内各地区

1年の無病息災を願い、地区ごとに特色ある手法で行われます。

2月中旬
公民館まつり
市内7公民館

各地区の公民館で、模擬店のほか創作体験、活動団体による各種展示や発表などを行います。

2月28日
五壇護摩
大山寺

僧侶が五穀や油を注いだ地慧の火で5つの護摩をたき、煩悩を焼き払って所願成就を祈願します。

3月中旬
大山登山マラソン大会
伊勢原駅～大山阿夫利神社下社

標高差650m、1610段の石段に挑戦する心臓破りのコースに全国の健脚自慢が集います。ゴール後の眺望は格別です。

データで振り返る伊勢原

50年間の伊勢原市の変遷を、さまざまなデータでご紹介します。

人口と世帯数

人口動向

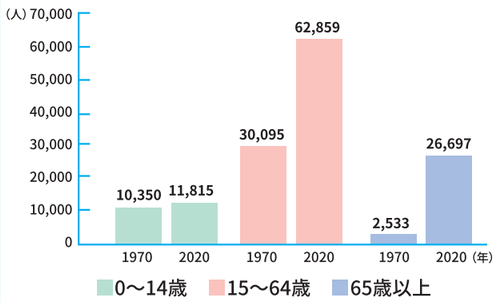
1970年
43,751人
↓
2020年9月
102,088人

世帯数

1970年
10,890世帯
↓
2020年9月
46,140世帯

【出典】1970年:昭和45年国勢調査
2020年:平成27年国勢調査を基にした推計人口

年齢別(3区分)の人口



※年齢不詳は含まない

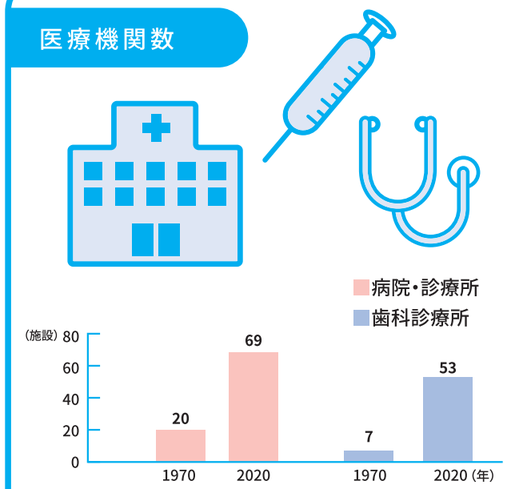
【出典】1970年:昭和45年国勢調査
2020年:推計人口(1月1日現在)

伊勢原駅の平均乗降客数

1970年
24,437人
↳
2019年度
51,705人

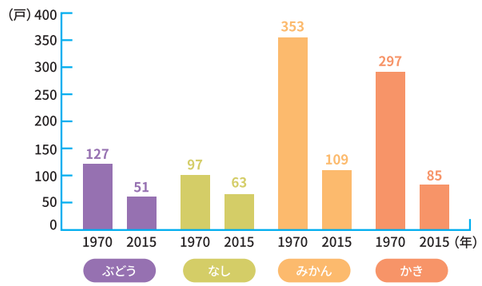
【出典】1970年:昭和48年市総合計画
2019年度:小田急電鉄株式会社

医療機関数



【出典】1970年:昭和47年市勢要覧
2020年:平塚保健福祉事務所秦野センター(12月末現在)

果樹園数



【出典】いずれも農林業センサス

酪農家数

1970年
346戸
↳
2015年
34戸

【出典】いずれも農林業センサス

事業所数

1970年
72社
↳
2019年
4,105社

【出典】1970年:昭和48年市総合計画
2019年:令和元年経済センサス

産業別の就業者数

1970年
21,120人
第1次産業:4,082人
第2次産業:8,225人
第3次産業:8,813人

↓

2015年
48,092人
第1次産業:1,134人
第2次産業:12,202人
第3次産業:31,910人
分類不能の産業:2,846人

第1次産業:農業、林業、漁業など
第2次産業:工業、建設業、鉱業など
第3次産業:商業、金融業、運送業、情報通信業、サービス業など

【出典】1970年:昭和45年国勢調査
2015年:平成27年国勢調査

観光客数

1970年 **614,300人**
↘
2019年 **1,985,427人**

【出典】1970年:昭和48年市総合計画
2019年:令和元年入込観光客数及び観光消費額

なかなか
いいなか
いせはら

伊勢原市制施行５０周年記念グラフ誌

発行：伊勢原市 企画部広報戦略課
〒259-1188 伊勢原市田中348番地 ／Tel.0463-94-4711（代表）
2021年3月